

九国プレ2014

国語

九州国際大学附属中学校

【注意事項】

- 1 開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。
- 3 試験時間は50分です。
- 4 解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。
- 6 答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

字数制限のある問題については、句読点なども一字とします。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章の意味が変わらない程度に、文を省略しています。

あなたがもし、大勢の人の前で話をしなければならなくなったとしましょう。ここでも、つかみは威力を⑧ハッキリします。

A、「日本経済」について私が講演したときのことです。壇上だんじょうが上がって開口一番、「日本経済が回復しつつあります。どうしてでしょうか？ それは、小泉内閣のおかげなんです」と始めました。

すると、皆さん「エッ!!」という反応を示します。「何コイツ、小泉内閣の回し者か」と。

小泉内閣の人が言うならともかく、ジャーナリストなのにどうしてそんなことを言うんだろう？ と驚き、あきれたような顔をする。これが、わたしにとってはつかみです。

「どうして小泉内閣のおかげかというと、小泉さんは日本経済の回復のために何もしてくれなかったからです」
ここで、①会場から笑いが起ります。

小泉さんに何かを頼んでも何もしてくれないことがわかった。②ジユウライの政治手法だと、企業は政治に対して、公共事業を③フヤシて景気対策をとるように働きかけます。政府はこれを受けて、国債を発行し、国の借金をさらにフヤシて公共事業に資金を投入します。B、小泉内閣は、こういうことを一切やらなかったのです。

そうなる、当初は政府に期待していた人たちもあきらめ、企業は、自力で立て直しをはかるしかありませんでした。血のにじむような苦しいリストラをして、なんとか立ち直ってきた。そうした結果、今、日本経済は回復しつつある。

まさに小泉さんのおかげじゃないですか、と言うと、最初に「小泉さんのおかげで日本経済が回復した」と②私が言った真意が伝わります。もちろんこれは④ヒニクを言ったわけですが、聞いてくれる人としては、「いきなり③こんな話をするのだから、この池上という男、何かおもしろいことを言いそうだな。期待できるかもしれない。じゃあ聞いてやろうか」となります。この後は、熱心に話を聞いてくれます。

C、逆に④つかみが弱い伝え方とはどんなものでしょうか。あなたが小学生のころを思い出してください。たとえば遠足について、次のように書きませんでしたか。朝起きたら、晴れていてうれしかったです。顔を洗って、ごはんを食べました。リュックサックを背負って、〇△山へ行きました。大きなへびがいてびっくりしました。

「時間おりの順番」
子どものころはこのように、時系列に沿って描写しがちです。子どもならこれでも構いませんが、大人はそうはいきません。この場合なら、出だしをたとえ、

草むらを分け入って進んでいたときのことでした。突然、大きなへびに出くわしました。これまで見たこともないような大きなへび！ ギョツとして、思わず後ずさりしてしまいました。と書く。

すると、「何というへびなんだ？ 彼らは無事だったのか？ へびはどうなったんだ？」とついついひき込まれてしまいます。それからおもむろに、この「事件」が遠足に行ったときのことだったと書くのです。同じことを書いたり話したりするにしても、わざと反対のことを言ったり、⑤イガイな話から始めたり、時系列を逆転させたりと、相手が興味を持つてくれる方法を考えましょう。

問一 ―― ㉠ ㉡ のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなが必要なものは、送りがなもふくめて書きなさい。

問二

A

C

 にあてはまる最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ では ウ ところが エ たとえば

問三 ―― ①「会場から笑いが起こります」とありますが、池上さんの話のどういう点がかみになっているのですか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本経済の回復が、政府が何もしてくれなかったからだという、会場の予想を見事に裏切っている点。
イ ジャーナリストなのに小泉内閣の回し者をよそおい、政治に詳しいフリをして会場を驚かせている点。

ウ 会場が小泉内閣に対して不平不満を抱いていることを察知して、反対に、わざと小泉さんをほめている点。

エ 政府が日本経済の回復のために何もしなかったから経済が回復したという、会場の予想通りの解答である点。

問四 ―― ②「私が言った真意が伝わります」とありますが、筆者は「真意」を語ることで、聞き手に対して、どういうことをねらっているのですか。次の説明の

--

 に、指定された字数で文章中から書き抜きなさい。

池上という男は、

1 (七字)

 ことを言いそうだし、

2 (二字)

 できるかもしれないと思い、

3 (三字)

 話を聞いてくれる、ということ。

問五 ―― ③「こんな話」の指し示す内容の中で、一番重要な一文をとらえ、最初と最後の四字ずつを書き抜きなさい。ただし、この問題に限り、句読点やかぎかっこは一字と数えません。

問六 ―― ④「つかみが弱い伝え方」とありますが、作文の場合、どのように描写していくことを言うのですか。「描写していくこと」につながるように、文章中から七字で書き抜きなさい。

問七 この文章のテーマである「つかみ」とは、どのようなタイミングで言えばよいのですか。①話をする場合と②文章を書く場合と、それぞれ三字以上五字以内で書き抜きなさい。

問八 この文章の説明の仕方として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文章のテーマを、起・承・転・結のはっきりした構成をとり論理的に説明している。
- イ 文章のテーマを、たとえを用いたりして、イメージ豊かに説明している。
- ウ 文章のテーマを、感覚に訴える表現を用い、実感できるように説明している。
- エ 文章のテーマを、いくつかの具体例をもとに、わかりやすく説明している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章の意味が変わらない程度に、文を省略しています。

権藤教頭は、子供たちの考えや行動を認めるタイプの先生で、周囲の圧力や権力などに影響されない様子が、誰からも形を整えられない「サボテン」のような存在として子供たちから好かれていた。一方、六年一組の生徒たちは、自由奔放で担任に迷惑ばかりかけ、担任は登校拒否を起こしてしまった。また、近所に住む大学生の秋山徹は、そんな子供たちを興味深く見守っていた。そんな中、教頭先生は、担任を代行して授業を行い、周りの先生に反対されている「奇妙なサボテン卒業研究」を応援していた。

卒業研究発表会の当日がやってきた。

「対象となったのは、この鉢植えです。これはメキシコなどの砂漠地帯にはえているリュウゼツランの一種です。僕たちはこれとコミュニケーションすることに成功し、この植物がいわゆる透視力とテレパシーを持つていることを発見しました。これから、それを証明する実験をお見せしたいと思います」

会場がざわめいた。教頭は A つばをのんだ。

一組の子供たちが、自分たちの席を離れ、会場のなかに散った。それぞれ手に小さな白紙と鉛筆を持っている。信一が説明した。

「これから、僕たち一組の生徒二十五人が、会場のなかから適当に選んだ方に、紙と鉛筆を渡します。渡された方は、その紙に何か一つ質問を書いてください。そして、書き終えたら、それを渡した一組の生徒に返してください」

子供たちが動きだし、紙と鉛筆が渡された。会場を見回した権藤教頭は、「女史」の山本直美が、後ろのほうに座っていた秋山徹に紙を手渡すのに気がついた。徹が直美に紙を返すところまで、教頭は B 見ていた。すると、徹と目があつた。彼は C 会釈し、微笑した。

驚いたことに、紙切れの一枚は権藤教頭のところにも回ってきた。書き終えると、赤いソックスの石田昭が、生真面目な顔で受け取った。

「それでは、一組のみんなは、集まった紙を僕のところまで持ってきてください」

言われたとおりに、子供たちは舞台上上がり、順番に、信一に紙切れを渡した。二十五枚集まると、信一はそれをきれいにそろえ、演台の鉢植えのわきに置いた。

「ではいよいよ、透視力の実験に移ります。理屈は簡単です。今この場で、適当に選んだ人に、何の準備もしないで書いていただいた質問を、この鉢植えが読み取ります。そしてそれを、テレパシーで僕に伝えるんです」

会場でさまざまな声が起こった。立ち上がる父母もいた。

「どうぞ席に戻ってください」信一は落ちついていて、「そして、鉢植えと僕が質問を読み取ったら、そのときは、その質問をした方が立ち上がって、当たっているかどうかを教えてください」

信一はまず、一番上になっている紙切れを、 C 取り出した。そして、鉢植えの下に置くと、自分は緑色の葉に手を触れ、目をつぶった。

沈黙。権藤教頭は、たまらなくなつて空咳をした。

「分かりました」信一が顔を上げた。鉢植えから手を離す。「皆さんのなかで、今年ジャイアンツが優勝するかどうか知りたいと書いた方はどなたですか？」

聴衆は B 辺りを見回す。ざわめきのなかで、頭をかきながら秋山徹が立ち上がった。

「間違まちがいありませんか？」

「うん、あつてるよ」徹は答えた。「本当にそう書きましたよ」

信一は、鉢植えの下から紙を取り出した。広げて読む。うなづく。

「そうですね。あつていました。どうもありがとうございます。では、次にいきます」

また同じ手順が繰り返され、信一は言った。

「来週の日曜日、家庭で箱根に行くので、あちらの方面の天気が分かればいいと思っっているのはどなたですか？」

ええー！　っと、手で口をおおいながら、中ほどに座っていた女性が立ち上がった。

こうして、二十四問、質問を書いた人物が驚きながら、苦笑しながら立ち上がるという結果になった。

二十五問目が教頭の番だった。信一はすべすべした眉間まげんにしわを寄せ、じっと鉢植えに手を置いていた。やがて言った。

「①僕たちもおなじです」

教頭は、「君たちサボテンと別れるのはとってもさびしい」と書いたのだった。

「鉢植えはすべて正しく読み取り、僕にテレパシーで伝えてくれました。実験は成功です。植物には心があります。皆さん、植物を大切にしてください」

信一は舞台を降りた。拍手が起おこった。

徹が訪ねてきたのは、卒業式から一週間後のことだった。

「隠居いんきよはいかがですか、先生」

一人暮らしには広い家に、権藤教頭は——もう、教頭でも先生でもなくなったのだが——D暮らしている。このところは本やアルバムの整理をして過すごしていた。

「僕、今日は配達に来たんです。」

徹は言つて、①小包こぶちを差し出した。薄茶色の防水紙ふすやいろで包み、麻あさひもでくくって、②たどたどしい花結びにした赤いリボンをかけてある。開けてみると、日本酒の四合びんの箱が出てきた。

「今日は和風にいこうというわけか」教頭は言ったが、徹は首を横に振った。

「まあ、まずその手紙を読んでみてください」

なるほど、箱といっしょに手紙が一通入っている。薄いブルーの封筒に、そろいのびんせんだった。文面は短かった。

「ナマハゲサボテン先生、校長先生にならないでいてくれてどうもありがとうございます」

その下に、「六年一組生徒一回」とある。

権藤教頭は、手紙を三度読んだ。それから目を上げて酒のびんを見、徹の顔を見やった。彼は顔いっぱいに笑つて言った。「植物のテレパシーなんて、うそっぱちなんですよ。発表会の日に一組の子供たちがやったことは、トリックだったんです」

トリックの説明がなされる。

教頭は、感心したりあきれたりした。 E つぶやいた。

「あの子たち、そこまで手の込んだことをして、③何が目的だったんだらう。ただみんなを驚かせただけだろうか」

「違いますよ。これを作ったかっただけです。作って先生にプレゼントすることが目的だったんですよ。それにはあの鉢植えがたくさん必要だったんですけど、ただ黙ってあんなものを買い集めたんじゃない、誰が疑うかもしれないからね。それで、超能力だなんて④口実を作ったんですよ」

「しかし、これはいったいなんだね？」教頭はびんを持ちあげた。

「デキーラですよ」徹は答えた。「リュウゼツランからつくる『火の酒』です」

座り込んだ教頭は、⑤厄うくそのびんを取り落としそうになった。

「子供たち、先生のおかげで、やりたいことができた。だから卒業研究で、先生にあげるものを作ろうと決めたんだそうです。で、お酒をね。あの子たち、先生の夢をちゃんと覚えていたんですよ」

この世に一つしかない酒だ。これはまさにそれだった。唯一無二の酒だった。

「あ、そうだ。もう一つあるんです。忘れちゃいけない」
→ただ「ひたして」となむこと。

徹は庭を横切り、とめてある車に近寄っていった。窓から手を突っ込むと、あの鉢植えをつかんで取り出した。

「これ、信一君が持っていたものです。これだけはデキーラにしなかったから、ほら」

教頭は鉢植えを手にした。そのぶかっような葉のなかに、一つだけぼつり、赤い花がついている。

「リュウゼツランは、一生に一度しか花をつけないんだそうですよ」と、徹が言った。

権藤教頭は、じっとデキーラを、花を、手紙を見つめた。

「校長先生にならないでいてくれて……ありがとう」

④その文字がほやけてしまつて、しようがなかった。

問一 ―― ㉠㉡の漢字の読みを、ひらがなに直しなさい。

問二 にあてはまる言葉を、次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア やれやれと イ ぽつりと ウ じつと エ こくりと オ そつと

問三 六年一組の卒業研究発表中の「聴衆」の心の変化を説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 感動 ↓ 興味 ↓ 不安 ↓ 落胆
イ 興味 ↓ 感動 ↓ 落胆 ↓ 怒り
ウ 不信 ↓ 疑心 ↓ 仰天 ↓ 感動
エ 興味 ↓ 不信 ↓ 怒り ↓ 仰天

問四 この文章を二つの場面に分けるとしたら、後半はどこから始まりますか。その一文の**最初の五字**を書き抜きなさい。

問五 ―― ①「僕たちもおなじです」とありますが、このときの「僕たち」の気持ちを、文章中の言葉を使って説明しなさい。

問六 ―― ②「ただどしい」を使った短文を作りなさい。なお、「ただどしく」など形を変えてもかまいません。しかし、ただ本文を写しただけのようなものは点数がありません。

問七 ―― ③とありますが、文章中からは生徒たちの「目的」は二つ読み取れます。次の説明の にあてはまる言葉を、指定された字数で文章中から書き抜きなさい。

教頭先生に、 酒と、 リュウゼツランの鉢植えをプレゼントすること。

問八 ―― ④とありますが、このときの教頭先生の気持ちを、その理由を明らかにして説明しなさい。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問一 漢字の読みには音と訓があります。次の熟語の読みは の中のどの組み合わせになっていますか。ア～エの記号で答えなさい。

- ① 推定 ② 穴場 ③ 強味 ④ 半年

ア	音と音	イ	音と訓
ウ	訓と訓	エ	訓と音

問二 二字熟語のしりとりになるように、□に当てはまる漢字を、下から一つずつ選んで、解答用紙に上から順に書きなさい。

【例】安心 配達 成功 績

① 行 □ 向 □ 品 □ 素

② 政 □ 療 □ 育 □ 立

③ 月 □ 物 □ 氷 □ 道

水	成	動	位
見	治	体	上
質	養	備	流

問三 次の四字熟語のカタカナを漢字に直し、その一字を書きなさい。

- ① 自シン満々
② ム我夢中
③ 明ロウ快活